

# TIME IN SHAKESPEARE'S PLAYS: HOW OLD IS HAMLET?

小田島 雄 志

小田島でございます。お忙しい中お集まりいただきまして、ほんとうにありがとうございます。

だいぶ前の話ですけれども、僕の師匠とっていい小津次郎というシェイクスピア学者がいました。この小津さんがあるとき、「わしがほんとにやりたいのはデミズムなんや」とおっしゃった。デミズムって言葉を僕は知らなくて、おそろおそろ「デミズムって何ですか」とうかがったら、「垢抜けしたアカデミズムや」(笑い)と、うれしそうな顔をしておっしゃった。これはいい言葉だなあと思って、僕もこの垢抜けしたアカデミズムをやろうと思って、気がついたらどうも僕の場合はデミズム抜けでアカだけ残ったという形です。

今日も実は最終的に記念講演となっていますけれども、最終講義をというお話を承ったものだから、ちゃんとした講義をしようと、アカデミックな、アカデミズムのまねしようと思って、何を話そうかと考えているうちに、やっぱりデミズム抜けのアカになってしまいまして、昔講談社の本というのは、面白くてためになる、というのが売りだったようだけれども、僕の今日の話はほんとにつまらなくてためにならない無駄な1時間をみなさんにお過ごしさせることとなります。あらかじめお断りしておきます。

## §1. Hamlet's age

シェイクスピアをアカデミズムで見ようと思うと、古典的な問題というのがいくつかあります。たとえば『オセロー』に出てくるイアゴの悪の動機は何か、あるいは『マクベス』に出てくるマクベス夫人は何人子供を生んだのか、いろいろそういう問題があります。

一番そういう古典的な問題が多いのが『ハムレット』です。たとえばハムレットはなぜ直ちに復讐しないのか、とか、あるいは、ハムレットはオフィーリアを愛していたのかいなかったのか、とか、そしてもう一つ、ハムレットはいくつなのか、という問題がある。この三つの中で一番つまらない問題がこの「ハムレットはいくつか」という(笑い)、それを今日僕は、僕なりに考えてお話ししたいと思います。

この、ハムレットはいくつなのかという問題が起こったのは、これはシェイクスピア自身の責任です。『ハムレット』を読んでいきますと、最初は十九かせいぜい二十歳の若者、ところが最後にいくと突然三十歳になってしまう、というところに問題が起こるわけですけれども。

まず最初にハムレットが親友のホレーシオと出会います。1幕2場。ホレーシオにたいしてハムレットは“fellow-student”と呼びかけるんですね。今日お配りした資料を早速見ていただきますけれども、1幕2場の177行のハムレットのセリフ、

Hamlet : I pray thee, do not mock me, fellow-student.

“I pray thee”は、頼む、お願いだ、ぐらいの気持ちですね。“do not mock me”は、バカにするのはよせ、“fellow-student”学友よ、というようないい方ですね。

ハムレットはホレーシオとヴィッテンベルクの大学の学友です。何でこんなことをいうかという、これは昔の同級生じゃなくて今も学友であるからです。大学を休んでこんなデンマークにやって来ていいのか、とか、怠けるのはもともと私の性分ですからね、みたいなやり取りがあるんです。つまり、大学をさぼって、ヴィッテンベルクの大学からデンマーク、エルシノアにやって来た。だから現役の大学生。

当時はだいたい中等教育を終えて十八歳ぐらいで大学に行ける。中には『ユートピア』を書いたサー・トーマス・モアのような天才は十六歳でオックスフォード大学に入った、という例外はありますが、だいたい十八ですね。だからハムレットも十八、十九、二十せいぜいそんな年齢だろうと思われる。

ところが5幕目でどういうことがあるかという、5幕1場153-177行、ちょっとカットしてサワリだけ抜いてるんですけども、まずハムレットが、“How long hast thou been a grave-maker”, 「お前が“grave-maker”墓掘りになってどれぐらいになるのか」と聞くと、First Clown, これは道化の1という、墓掘りを演じている道化役者ですけども、

1st Clown : …it was the very day that young Hamlet was born.

…I have been sexton here, man and boy, thirty years.

“young Hamlet”といったのは、ハムレットのお父さんも同名のハムレットですから、息子を指します。“old Hamlet”は父親になります。つまり、王子ハムレットがお生まれになった、the very dayまさにその日ですよ、自分が墓掘りになったのはハムレットがお生まれになった日、そしてしばらくたって、“I have been sexton here”わたしはここで墓掘りになって、“man and boy”といういい方は子供の頃からずっと、三十年になります、ということですね。

で、僕の訳を、今のところをカットしたところも含めて読んでみるとこういうやり取りです。

ハムレット：墓掘りになってから何年になる？

道化1：あっしが墓掘りになったのは、忘れもしねえ、先王ハムレット様がフォーティプラスをやっつけなすったその日ですあ。

ハムレット：という、何年前のことかな？

道化1：それがわからねえんで？ どんとんまだってそんなことぐらいわかるがな。

王子のハムレット様がお生まれなすった日じゃねえですか、気がちがってイギリスに追いやられた王子様が。

ハムレット：そうだったな。で、どうしてイギリスに追いやられたのだ？

道化1：どうしてって、気がちがったからでさ。あそこに行きゃあ正気に戻る、戻らなくたってあそこじゃ平気だ。

ハムレット：どうして？

道化1：あそこじゃ気がちがっていても目だたねえからな、何しろみんな気がいばっかりだから。

これは当時のイギリスの観客は非常に喜んだでしょうね。

で、まだまだやり取りがあったあと、最後に、

道化1：何しろあっしはガキの頃から三十年、このデンマークの墓掘りだ。

というセリフになる。明らかに、ハムレットが生まれた日に墓掘りになった男が三十年墓掘りをやっている、ということはハムレットは三十歳である。

さらにもうちょっと先、同じ場なんですけども、5幕1場189-199、道化1が“this (Yorick's) skull has lain in the earth three and twenty-years.”この頭蓋骨は、これはヨリックのものとあとでわかりますが、二十三年ほど土の中に埋まっていた、といういい方です。「この頭蓋骨は二十三年間ここに埋まってたやつだ」。ハムレットが、「誰のだ？」というと、「とんでもない野郎、ヨリックって野郎だ、王様の道化だった男の頭蓋骨だ。」と。ハムレットが、「これが？」道化1が「そうよ。」でハムレットが、「ちょっと見せてくれ。」といって頭蓋骨を受け取る。これは有名な場面で、よくハムレットの絵とか写真とかになっている。あるいはストラトフォード・アポン・エイヴォンに行くと、ロイヤル・シェイクスピア・シアターの前にシェイクスピアの像を囲む四つの像がある。そのうちのハムレットは頭蓋骨を持っている。これがヨリックの頭蓋骨ですね。

そこでハムレットはこういいます。「あわれなものだな、ヨリック！ よく知っていた男だ、ホレーシオ。気のきいた洒落や冗談をのべつ吐き散らしたやつだった、何度となくおぶってもらったものだが、こうなってみると云々」

二十三年埋まっていた頭蓋骨によくおぶってもらったハムレットが十九だ、では勘定が合わないですね。三十になると、ハムレットが三つ四つの頃よくおぶってもらったやつが、それから数年後、ハムレットが七つのときに死んだ、それで二十三年埋もれていると、これで勘定が合うわけですね。

だから5幕1場、ふつう墓掘りの場といわれるこの場面ではハムレットは三十です。さかのぼって、じゃあ三十で大学生というのはあり得るのか。あり得ないとはいえないけれども、一国の王子が三十になって大学に行くというのはおかしい。

もっといえば、ハムレットのお母さんガートルードはいくつなんだ。ハムレットが三十ならば、当時早く結婚しても、まあジュリエットを考えれば十四、五で結婚して子供を生んでいいんだけれども、四十四、五。当時人生五十年ですから、今だったら七十か八十に相当する年齢です。それで再婚しますかね（笑い）。いけないとはいわないけれどもね、どうもつつまが合わない。やはりガートルードというのはまだまだ若い感じですね。ハムレットが十九、二十

であれば三十代半ば。そう思いたい（笑い）。

さてそこでハムレットはいくつなんだという問題が起こるわけです。

実際に『ハムレット』を見ていて、1幕から5幕までの間にどれくらい時間がたったのか。十年ぐらい時間がたてば十九歳で始まって三十で終わっていいわけですね。仔細に見ていきますとね、どうしても十年はたってない。

まず1幕1場から見ていくと、亡霊が登場してホレーシオたちに会う場面。深夜1時に亡霊が出てきて、見張っていたホレーシオやマーセラが「寒い、寒い」といってる冬の夜です。そして亡霊が去ったあと、「このことはハムレット様にお知らせしよう」というホレーシオに、マーセラスは、「今朝お目にかかる場所はわかっている」といいます。

そして1幕2場、そこでマーセラス、ホレーシオたちが先王の亡霊に出会った報告をする。つまり1幕1場の午前1時のその日の朝が1幕2場ですね。そしてその日ハムレットは、「では今夜、おれも見張りに立とう」という。

そして1幕3場、これはポローニウスという男がいて、その息子レアティーズがパリ留学からいったん引き揚げてきたのをまたパリに戻るので、その妹オフィーリアと別れる場面。おやじが出てきてポローニウス親子三人の場というのがあるわけです。

そして1幕4場、5場でハムレットが見張りに立って、やはり寒い、身を切るような寒さだと。で、亡霊と出会って、「自分は実の弟によって命も王冠も王妃も、一度に奪われた、ハムレット、復讐せよ」という亡霊の命令を受ける。これも午前1時に現れますから、1幕だけでほしい24時間、あしかけ2日といえますかね。

で、1幕はまだそれだけしかたっていません。そしてその1幕の最後にハムレットは、「これから、自分は狂人じみた行動をわざとするかもしれない。そのときに、あれは亡霊に会ったせいだ、などと絶対にいわないでくれよ。」と、ホレーシオやマーセラスに頼む。つまりこれは当時の復讐劇のパターンであって、復讐者は佯狂、狂人のふりをして相手を油断させておいて復讐を遂げ、自分も倒されるというのが、当時の復讐劇の常套手段なのです。

日本でいえば、大石内蔵助または大星由良之助が祇園で「鬼さんこちら」と芸者遊びをして、酒飲んで、昼行灯と仇名されて、吉良一派を油断させて大望を遂げる、というのが『忠臣蔵』です。大石内蔵助は芸者遊びが好きだったんじゃないかという説もあって、僕はその説に賛成なんだけれども。いずれにしろ、復讐者は相手を油断させるために狂人や阿呆のふりをするもので、ハムレットもそのように宣言します。

そして2幕1場、ここから実はおかしくなる。つまり復讐するために狂人のふりをするといった男が、何ヶ月かたってから狂人のふりをするということはないですね。すぐに翌日からでもたぶん狂人のふりをするだろう、と観客の気持ちはそうなってます。

ただ、2幕1場はどうなっているかというと、まず、国王クローディアスの腹心の部下である、総理大臣格のポローニウスが、レナルドーという召使を呼んで、息子レアティーズがパリに行った。さっきちょっといった1幕3場で別れた息子はパリに行ったので、パリでどうい

生活をしているかちゃんと調べてこい、といってスパイを頼むんですね。息子が行った翌日にすぐスパイを放つということはまずないでしょうね。もともとパリにいて、戴冠式のためにいったん帰ってきた。そしてまた戻った。まあしばらくたって、数週間か数ヶ月たってからどういふ暮らしをしているか見てこいというのがふつうでしょう。

ところが、そのレナルドーをスパイに出したあと、オフィーリアがやって来て、ハムレットが気が狂っておかしなふるまいをしていると。ということは1幕5場から2幕1場の間にポローニウスとレナルドーのシーンだけを見ると数週間あるいは数ヶ月たっているという感覚があるのに、ハムレットがオフィーリアに対して最初に気が狂ったふりを見せるのは、これはもうすぐ翌日か翌々日、という感じがする。つまりここでもう時間がねじれてきます。1幕最後から2幕に、すぐ翌日なのか数週間後なのか……。ここでまず最初のねじれがあります。

で、次の2幕2場というのは、ハムレットがどうやらおかしくなったらしいので、国王たちがその原因を探ろうとする。そのためにローゼンクランツとギルデンストーンというハムレットの幼馴染みを呼び寄せる。これもまあ翌日というわけにはいかないけれども、あまり長い時間はたたないでこの二人を呼んだんでしょね。それでハムレット狂気の原因を探ろうとして国王は二人を呼ぶんだけど、ポローニアスのほうは、娘オフィーリアへの失恋ゆえに気が狂ったと思っている。そこで尼寺の場を計画します。そこでハムレット一人のところにオフィーリアをけしかけて立ち聞きしようという計画がいわれる。これが2幕2場です。この2幕2場の最後に役者たちが登場する。劇中劇といわれる『ゴンザーゴ殺し』という芝居をやることになるんだけど、その役者たちが出てきたあとハムレットは、明日ゴンザーゴ殺しをやってくれと役者に頼む。

次の次の場になりますが、3幕2場で劇中劇が上演される。そうすると2幕2場、2幕の最後から3幕の2場は翌日です。で、その間に尼寺の場がある。3幕1場、これは例の“to be or not to be”という有名な独白をしながらハムレットが出てくる、オフィーリアが祈禱書をもっている、そこで尼寺へ行けということになる場面ですね。これは前の場で尼寺の場の計画がいわれてそれが実行される場。だから2幕2場の、これもまた翌日ぐらいでいいだろう。

そしてさらにそのあとに劇中劇がなされる。『ゴンザーゴ殺し』が上演されるのははっきりいって尼寺の場と同じ日だろうと。セリフの上からそうなってきます。そして3幕2場が劇中劇。そのあと3幕3場でハムレットが母親ガートルードに呼ばれていって、4場は王妃寝室の場、あるいは王妃諫言の場といわれるけれども、ハムレットが母親に向かってなじるという場面になる。これは劇中劇のあとの夜ですね。ということは3幕4場は2幕の最後から見ると翌日です。

次の4幕1, 2, 3場というのはハムレットがその王妃の寝室でガートルードをなじるときにかくれて立ち聞きしていたポローニアスを殺してしまったので、そのため、ローゼンクランツとギルデンストーンが探し回ってハムレットを捕まえるシーケンス。だからこの4幕1, 2, 3場もまだ劇中劇と同じ日です。そして4幕4場というのはこれは昼間の話なんで、ハムレッ

トが捕まってすぐ翌日イギリス送りになる。ということは、勘定すると2幕2場、つまり2幕が終わってからたった2日で4幕4場までできてしまうんです。

そして次の4幕5場というのがオフィーリア狂乱の場といわれる。その狂乱の場があって、次の4幕6場、これはハムレットがイギリス送りになった船から抜け出してデンマークに帰ってきたという知らせがくる場。そして4幕7場、ガートルードがオフィーリアの死を告げるという場面になります。そしてこのオフィーリア狂乱、つまり4幕5場というのは、4幕4場からどれぐらい時間がたっているか、まったくわかりません。ただし、芝居の流れから見ると、オフィーリアが気が狂ったのは、ハムレットの問題だけではなくて、父親の死、ポーニアスの死ということが関係するだろう。しかし、父親が死んだのは、1幕は冬の夜から始まってますけれども、それからどう考えても数日間か、途中で時間がねじれてもせいぜい数週間。

ただし、オフィーリアがここで花を持ってきて、みんなに渡すわけですね。で、その花を見ていきますと、だいたい5月か6月に咲く花がほとんどです。せっかく調べたからちょっと読んでいきましょう。マンネンロウ、これは春から夏に咲く花。三色スミレ、これは5月から9月まで咲きます。ウイキョウ、これは夏の花。オダマキ、これは5月から6月にかけて。ヘンルーダ、これは6月から9月。ヒナギク、これは日本では冬でも咲いたりするんだけどイギリスでは4月の花と呼ばれています。まあ、だいたい5、6月、春から初夏の花です。

さらに4幕7場でガートルードがオフィーリアの死を告げます。オフィーリアが野に咲く花を花輪にして、川辺に立っている柳の枝に花輪をかけようとして、落ちて溺れて死んでいく。ではこの花はどういう花があるかということ、まずキンポウゲ、これは春ですね。イラクサ、これは花が咲くのは秋だけれども花じゃなくていいでしょうね。それからここにもヒナギクが出てくる。それから紫蘭、紫の蘭と書く、これも春から初夏。つまり狂乱のオフィーリアからオフィーリアの死に至る花は春から初夏、つまり1幕の寒い冬の夜から数ヶ月はたっているということです。

そしてその間で、ハムレットが帰国したという知らせがあるのが4幕6場だったんだけど、これはつまり4幕の4場でハムレットはローゼンクランツとギルデンストーンを共に連れて港に向かい、イギリスに行く途中の場があり、そしてまた帰ってくる。当然これは海賊に襲われて戦って捕虜になって帰ってきたんだけど、ここで結局は数日、あるいは十数日たっていると考えていいかもしれない。

そして最後の5幕1場、2場になると、ハムレットが帰ってきてさっきの墓掘りの場からオフィーリアが死んだということを知る。ということは、オフィーリアの埋葬まであまり時間がたつはずがないので、4幕7場でオフィーリアの死が告げられた、それからあまり日にちを置かずにはオフィーリア埋葬になるでしょう。そして、すぐそのあともう5幕2場、剣の試合で死んでいく。これが全体の時の流れです。

そうすると、まあだいたい冬の夜、ただ寒いといってもほんとうにイギリスというのは日本よりもはるかに緯度が高いんで、舞台はデンマークだけれども、上演されているのはイギリス

だからイギリスの観客の感じになってみると、2月、3月の夜はまだ寒いです。でも少なくともその花が咲き乱れるまで、メーデー、5月1日が労働者の記念日になるのは19世紀になってからなんで、シェイクスピアの時代のメーデーというのは花祭りの日ですね。5月1日になるとさすがに寒いイギリスでもぱあっと花が咲く。だから、どう考えても劇全体で数ヶ月はたってるだろう。

ただし、これは芝居をご覧になってると、芝居の特別な時間があるので、さっきから僕がいてるのは、今夜見張りに立とうとか、明日『ゴンザーゴ殺し』をやってくれと、つまり場面があって次の場面になるとその数週間、数ヶ月たったという感覚があまりわからないんです。ずうっとどどんたたっていったような気がして見ると、ああそうかも春から初夏になったかというような、気がつくともそういうふうになっている、ということです。

ただし、どう考えても十年という歳月は流れるはずがない。

そこで最初に戻ります。ハムレットはいくつなんだ、という問題があるわけなのです。

## §2. What is time to Shakespeare?

そこで、この問題はいったん置いて、シェイクスピアは時というものを、time というものをどう考えていたかということをやっと見てみます。いろんなところでシェイクスピアは、時とはこういうものだということをや、名セリフとっていい言葉でしょっちゅういってます。今日必要なのは、『ハムレット』のちょっと前、1、2年前に書いた *As You Like It*, 『お気に召すまま』に典型的に見えているんでちょっと紹介しますが、資料の§2. What is time to Shakespeare? 「シェイクスピアにとって時とは何か」、その a), 『お気に召すまま』の3幕2場、326行目にあるロザリンドというヒロインのセリフ。“Time travelers in divers paces with divers persons.” 時というものはそれぞれの人に対してそれぞれのペースでもって旅をする。というのが直訳になりますけれども、ここちょっと先まで僕の訳で読むと、ロザリンドは男装しています。で、アーデンの森というところで恋人オーランドーと出会う。で、オーランドーは、恋人を見てわからないのかといわれると、芝居の世界だと変装したら絶対ばれないんです。親だろうが恋人だろうが。だから恋人のオーランドーも、まさかロザリンドが男装しているとは思わない。気がつかないでいるんだけれども、その二人のやり取りです。

ロザリンド：時はそれぞれの人によってそれぞれの速さで歩むものです。一つ教えてあげましょうか。時が誰にはのんびり歩きをし、誰にはよちよち歩きをし、誰には全力疾走し、誰には完全停止するか。

オーランドー：ではまず、よちよち歩きをするのは？

ロザリンド：時がよちよち歩きをするのは、婚約してから式を挙げるまでの娘の場合だ。それがたとえ7日間しかなくても、時が懸命に汗水流してよちよち歩くものだから、7年間もあるように思われるのです。

オーランドー：のんびり歩きというのは？

ロザリンド：ラテン語を知らない神父と、痛風をわずらっていない金持ちが相手のときです。一方は勉強のしようがないからよく眠れるし、他方は苦痛を感じないから愉しく暮らせる。つまり一方は無駄骨を折らせる学問の重荷を背負わないですむわけだし、他方は堪え難い貧乏の重荷に堪えなくてすむわけだ。こういう連中を相手にすると時はのんびり歩きをするのです。

オーランドー：全力疾走するのは？

ロザリンド：絞首台に引っ立てられる泥棒です、いくら足をゆっくり運ぼうとしても、あつという間に着いてしまう。

オーランドー：では完全停止というのは？

ロザリンド：休暇中の弁護士です、裁判と裁判の間は眠って過ごせるので、時が歩み続けていることさえ感じないわけです。

こういうやり取りがあります。

今、世田谷パブリックシアターでゲーテの『ファウスト』という芝居をやってますけれども、その有名なセリフに「時よ止まれ、あなたは美しい」というのがあるけれども、時は人間の都合で勝手に止まってくれないですよ、ふつう。ところがシェイクスピアにいわせると、絞首台に引っ立てられる死刑囚の場合、時は全力疾走することもあるし、休暇中の弁護士だと完全停止する。つまり、時というのは人それぞれの気分しだいで、早くもなれば遅くもなる。これが実はシェイクスピアの一貫している時間論です。

もう一つ、ついでに例として挙げますが、b)、2幕7場の26、27行。ジェークイズが、Fool、阿呆というのは道化、宮廷の道化ですね、その道化の言葉を引用するという言葉。道化がこんなことをいっていた。その前は何かあるかという、道化がポケットから時計を出して、「今は10時だ。1時間前は9時だった、1時間後は11時だろう」といったあと、このセリフになるんですね。

今は10時だ。1時間前は9時だった、1時間後は11時だろう、というだけでは何の意味もない。そのあとにすごいセリフが出てくるんです。

Jaques : And so from hour to hour we ripe and ripe,

And then from hour to hour we rot and rot.

かくのごとく時々刻々われわれは熟していく、

しかしてまた時々刻々われわれは腐っていく。

つまり、たとえば柿の実が熟していくということは同時に腐っていくということでもある。このへんのイメージは、まあわかりますね。人間も同じなんです。若者から大人になり老人になっていく、成熟していくのは実は腐っていくのと同じなんです。時の二つの面、それを二重に見ることができる、表があれば裏があるというような感じで。人間というものは成熟していくことが実はすなわち腐敗していくプロセスでもあるということです。これが時間というか、time というものが持っている二重性ですね。



つまりシェイクスピアが時を見るときに、客観的な時間というものをしているのではなくて、非常に主観的に、まるで生きているものを見るように見ていることは確かだろうと思います。

### §3. “Double-time” in *Othello*.

そう思って見ると、シェイクスピアの芝居の時間もかなりいい加減といえいい加減、そのいい加減なもの一番代表的なのが、悲劇としては『ハムレット』の次に書かれた『オセロー』ですね。実はこの『オセロー』の問題というのは、シェイクスピア学の学者の中ではもう解決済みなんです。ちょっとだけ申し上げれば、資料の§3. “Double-time” in *Othello* とあります。このダブル・タイムという観念を持ってくれば『オセロー』の謎は解ける。

『オセロー』というのはどういうお芝居かというと、ヴェネチア、英語でヴェニス共和国が、外人部隊を雇った。これは歴史にあった話ですけれども。そのムーア、アフリカ西北部、今のモーリタニアあたりの、本来なら肌の色は褐色なただけけれども、シェイクスピア時代、エリザベス朝のイギリス人は、「悪魔の色」といういい方で真っ黒の黒人を考えていた。

そのムーア人の外人部隊の将軍がオセローですね。これがブラバンショーという元老院筆頭議員のひとり娘デズデモナーと愛し愛されて結ばれた。デズデモナーが、供の者といってもゴンドラの船頭一人連れて駆け落ちして来て、オセローの黒い胸に飛び込んでいったと報告される。そしてすぐその日のうちにオセローは呼び出されて、実はヴェネチア共和国の領土であるキプロス島にトルコ艦隊が向かっているから守りに行ってくれ、というので、デズデモナーが駆け落ちしてきたその日、初夜を過ごすこともなくキプロスに向かうことになるわけです。

キプロスではどうなったかということ、オセローの副官のキャシオーの乗った船が最初に着きます。そのあと、デズデモナーをイアーゴーという、これは悪いやつなただけでもオセローが信頼している部下に預けて、本当はオセローが先に着くはずだったのが、イアーゴーとデズデモナーが乗った船が先に着いてしまう。そして最後にオセローの船が着く。同じ日に着きます。

途中で嵐があってトルコ艦隊は戦わずして全滅しています。そこで、キプロスに着いたときに布告係、ヘラルドが出てきて、本日は戦いにも勝ったし（戦わずして勝った）、オセロー將軍の結婚を祝う日でもあるので、11時までは酒を飲んでもかまわんというような布告をするんです。

それがこの資料の§3.の a) です。

Heraldo : …besides these beneficial news, it is the celebration of his nuptial. (この

戦いに勝ったという吉報に加えて、今日は將軍オセローの結婚のお祝いでもある。)

だから飲食は自由だと、まあこうなるんだけれども、つまりオセローとデズデモナーは、このキプロスに着いて初めて結婚の初夜を迎えるんです。それをイアーゴーという悪いやつがいろいろと悪計をめぐらせて、副官キャシオーという酒が飲めないやつに飲ませて、ロダリーゴーという金持ちの馬鹿息子を使って喧嘩売らせて大騒ぎを起こしたんで、結局このキプロス島

の総督にキャッシュオーが重傷を負わせる。そこでオセローが出てきて、副官はクビだ、という。

キャッシュオーが、ああ名誉が失われたと嘆いていると、そこへまたイーゴーがやってきて、だったら、今の將軍の將軍は奥さんだ、デズデモーナだと、デズデモーナに頼んだほうがいい、というのでキャッシュオーが、いいこと教えてくれたとあって、その翌朝寝もしないでデズデモーナのところへ行って、復職へのとりなしを頼む。そこへ、ちゃんと計算済みなんで、イーゴーは、オセローを連れてきてデズデモーナにキャッシュオーが頼んでるのを見て、「あっと、こいつはまずいな。」という。「何がまずいんだ？」ときくと、「いやべつに。」と答える。キャッシュオーからすると、奥さんに頼んでるところを將軍に見られるのはまずいからあわてて逃げていく。それを見てオセローは何も疑わずに、「今去って行くのはあれはキャッシュオーだろう。」という。イーゴーは、「いやそんなはずはありません。キャッシュオーが將軍の顔を見て、何か悪いことをしているのを見つかったかのようにこそこそ逃げたりするものですか。」というところから始まって、結局、「実はあの二人あやしいですぜ、何度も浮気してます。」と。

ちょっと待てよといいたくなる。何度も浮気する時間はないんですよね。結婚しての翌日の朝です。途中ヴェネチアからキプロスまでの船の間というのはイーゴーがそばについてる。キャッシュオーはべつの船。どう考えてもおかしいですよ。しかも何度も浮気してるとイーゴーはいうし、たとえばですけれども、オセローがこういいます。次のb)

Othello : What sense had I of her stol'n hours of lust?

I saw't not, thought it not; it harm'd not me,

I slept the next night well, fed well, was free and merry...

あれのひそかな不義密通をおれは感じとっていたか？

おれは見なかった、考えなかった、心を痛めなかった。

次の日もよく眠った、よく食った、楽しかった...

これはさっきちょっといいましたが何ヶ月もたっているという感じですよ。オセローにおけるダブル・タイムとって、本当は一晩しかたっていないけれども、心理的な時間が別に流れていて、時間の二重構造ですね、これだともう何ヶ月かたってるんだと。

実はこれ、元をいえば、『オセロー』というのは、シェイクスピアの作品全部そうであるように種本があります。ジェラルディ・チンティオというイタリア人の書いた小説があります。チンティオの原作だと、結婚後、オセローとデズデモーナがしばらく結婚生活を送って、それからキプロスの戦いになるということなんです。ところが何ヶ月も二人がいたら、ドラマとしては非常に弱まってしまうので、そこで時間を凝縮した。シェイクスピアはこの手をよく使います。

それで有名なのはやっぱり『ロミオとジュリエット』。これもバンデルロというイタリア人の小説が元になり、仏訳され英訳され、英訳を種本にしてシェイクスピアは『ロミオとジュリエット』を書いた。その種本だと芝居が始まって終わるまでざっと9ヶ月はたってます。ロミオとジュリエットがひそかに結婚してからも数ヶ月たってる。だけどそれじゃあドラマティッ

クじゃないんで、シェイクスピアはそれを勘定の仕方によっては4日になるか5日になるか、まあせいぜい4、5日に凝縮した。

『オセロー』でもそういう具合に凝縮してしまったために時間の二重構造というのが出てきた。これはもうシェイクスピアの学会で公認されていることですね。

#### §4. “Double-time” in *Hamlet*.

だったら、僕は『ハムレット』にもダブル・タイムの理論を応用していいんじゃないかと思うんです。実は、まだあまりそういう人はいないんですよ。

今、日本のシェイクスピア学会で最先端に行く男の一人は河合祥一郎という、東大教養学部の助教授ですけれども、ケンブリッジでPh.D.取ってきた男です。『ハムレット』の翻訳では野村万斎、藤原竜也の二人のハムレットが去年相次いで上演されたその翻訳者で、『ハムレットは太っていた』というこれは名著です。題名で笑っちゃいけない。Ph.D.論文を日本人にわかりやすく書いてくれた、サントリー学芸賞取ったりした名著です。

それを書いたその河合祥一郎という男に、『謎解きハムレット』という本があります。これは非常にわかりやすいし非常に面白い。ここでその問題について河合君、実は僕は仲人をやってるんで少し宣伝してやってもいいんだけど、面白い本ですが、この中でこの問題について学者らしくこういうことをいってます。

『ハムレット』のテキストというのはシェイクスピアが生きてる間に何回か出版されている。その最初に出たのが、多分初演が1601年前後、その2年後1603年にザ・ファースト・クオート(The first quarto)という本が出ています。quartoというのは紙の四つ折り本、紙の原型を四つにたたんだ大きさです。今でいえばB6ぐらいになりますか。それよりもっと大きな二つ折り本というのものもある。Folioといいます。シェイクスピアが生きてる間に四つ折り判が出ている。その最初1603年に出たのはふつう海賊版といわれている。で、非常に短い。だけど、もしかしたらこれは上演台本かもしれないという説もあるし、日本でもわざわざこの第1四つ折り本といわれる本で上演された、これは安西徹雄君という人が演劇集団「円」でやったことがありました。

このThe first quartoといわれる版だと墓掘り三十歳というのは出てきません。それからヨリックの頭蓋骨を二十三年じゃなくて十二年しか埋められてないということになっている。となると十九歳ぐらいでちょうど合うんです。

だからもしかしたら、この河合君の説だと——初演の頃は十九歳でやってたのかもしれない。ハムレットは当初十九歳程度に設定されていた可能性がある。その後ひょっとするとプラトンの『国家』に「哲学を始めるのにふさわしい年齢は三十歳」とあるのをシェイクスピアは読んだのだろうか云々、とあって、そこで哲学的なハムレットの年齢を十九歳から三十歳に設定し直したのかもしれない。

で、これはあり得るんです。というのは、当時はロングラン・システムじゃなくて日替わり

興行やっているわけです。日替わり興行をやっているとテキストは定着しません。再演するときに、あそこはうけたからもっと引き伸ばそうとか、あそこはもうカットだなとか、やるたびに少しずつ手直しされてきます。それで集大成されたのが今残っているテキストだと僕は思います。つまり今1603年版は bad quarto と呼ばれる海賊版。その翌年、海賊版に対抗して、でしょうね、これが正しいテキストだ、とわざわざことわって second quarto 第2四つ折り版というのが出ています。ここで初めて三十歳のセリフが出てきてしまうわけですね。第5幕の墓掘りの場、で、三十歳になる。

そしてシェイクスピアが死んで7年後に出た最初の二つ折り本 first folio といいますが、それもちゃんと三十歳というのが出てくる。もしかするとそこで設定し直したならば、役者のほうは、三十歳になったぞといわれれば最初の学生的なものは何か手を入れて変えるでしょうね。だからこの河合君の説というのは、十九歳説と三十歳説が混入している原因といいますか、いろんな版で上演したあとからだから三十歳説が入ったかもしれないというその説明はできるけど、じゃあ最初は何でまだ学生のままなのか、そこまで彼は踏み込んでいません。ただし随所に彼の考えの非常に面白いことが出てくるんでお薦めですけども。

で、僕はどう思うか、という結論に入ります。『ハムレット』の中の時間で忘れてはならない問題がある。それは何かというと、ハムレットの時間に対するあいまいな感覚です。一番はっきりしているのは、お父さんが死んだ日からどれぐらい時間がたってるかというのが非常にいい加減なんです。

有名な1幕2場で、「このからだ溶けて消えてしまえばいい」というところから始まる第一独白というものがあります。

そこでちょっと読みますと、「亡くなってまだふた月、いやいやふた月にもならぬ」と父親のことを思っています。「立派な国王だった」、今の王、クローディアスですけども、「と比べれば獅子と虫けらほども違う云々」といって、それがひと月とたたぬのに、“within a month” なんだけど、といって、もうしばらくして、ほんのひと月で、さらにひと月もたたぬのに、結婚したとは、何とけしからん速さだ、“oh, wicked speed” といって、母の再婚が早すぎるといって怒るんです。これがハムレットの最初の悩みです。つまり最初ふた月で、といって、ふた月にもならぬ、ひと月とたたぬのに、ほんのひと月で、という。

そしてさらに、今度は劇中劇の場、3幕2場だとどうなるかということ、ハムレットが劇中劇が始まる前にオフィーリアに膝枕していか云々というやり取りがある。そしてハムレットは興奮状態にあります。劇中劇で亡霊のことが真実かどうかを確かめようとしている。そしてオフィーリアに、「おふぎけになって。」といわれると「誰が、おれが？」といってハムレットは、「しようがあるまい、おれは天下随一の道化役者だからな。それに、人間、面白おかしく暮らすほか何をすればいい。見ろ、母上の顔を。たいそう楽しそうではないか。父上亡くなって2時間とたたぬというのにあれだ」

2時間ということはないですよ。ハムレットはここで狂人のふりをしている。まだ佯狂で

す。劇中劇が始まる直前にホレーシオに向かって、「おれはまた狂人に戻らねばならぬ」といって、ニセ狂人をやってるところなんで、2時間というのはいい。ところが、オフィーリアがそこで、「いいえ、もうふた月の倍“twice two months”にもなります」といいます。4ヶ月たったはずです。するとハムレットは何ていうかという、「そんなになるか、それでは喪服は悪魔に返し、同じ黒でも貂の毛皮ぐらい着なければな。驚いたな、死んでふた月、まだ忘れられない」と。ふた月、ていうんですよ。オフィーリアはふた月の倍といったんですよ。またこれでふた月という。またこれは河合君が見事にいってるのは、ハムレットは母親の早すぎる再婚を嘆くあまり、父親が死んでからまだそんなに時間がたっていないのに、といたいあまり、非常に短く短く、これは主観的な時間の流れですね、いってるんだろうと。

そういうハムレットの時間感覚からしますと、ここで急遽結論に持って行ってしまいますけれども、『ハムレット』にもダブル・タイムという時間の二つの流れがある。もっといえば、僕は三つといてもいいと思うんだけど、体感速度からすると、ほんとに1週間か10日ぐらいの感じ。しかしよく見ると数ヶ月たってる。実際の時の流れは数ヶ月。冬から初夏。ところが心理的にはハムレットは、十年歳取っちゃうんです。精神年齢的には、精神時間は。

それは、もう時間になったのであまり詳しくはいいません。

結論に行ってしまいますと、資料の§4. “Double-time” in *Hamlet*. の a) があの有名な第三独白ですね。“To be, or not to be: that is the question.” 説明すると長くなるので。「生きるべきか死すべきか」という訳は僕は取りません。「このままでいいのかいけないのか、それが問題だ」というのが僕の訳で、この解説ちょっと時間ないんでやめます。

ただ要するに、「to be か not to be か、それが問題だ」といってこの結論はどうなっているのか。結論はその…のあと、“thus conscience does make cowards of us all.” で、conscience は、今だと「良心」ですけれども、シェイクスピア当時は“reflection” 反省したり考えたりすることですね。「このように物思う心がわれわれを臆病にする。」と僕は訳してますけれども、“make cowards of us all” つまり、われわれみんなを臆病にしてしまう。To be か not to be かどちらが立派かということ自分を問かけるその結論がこれです。

シェイクスピアの大事な独白は1行目をあいまいにして、2行目から説明をつけます。これは『オセロー』にも『マクベス』にもその例は出せるけれども、それは割愛しまして、To be か not to be か、のあと何ていってるかという、どちらがノーブルか、どちらが立派か、気高いかといって、暴虐な運命の矢玉をじっと耐え忍ぶことか、それとも寄せくる怒濤の苦難に敢然と立ち向かい、戦ってこれに終止符を打つことか。To be というのは今辛い境遇にある、それにじっと堪えてることです。これだと生きていけます。だから生きるべきか、と訳して誤訳にはならない。運命に挑戦して、寄せくる怒濤の波に敢然と立ち向かい、戦って終止符を打つ。運命と戦えば人間は必ず敗れて死にます。だから死を賭して戦うことになる。それが To be と not to be の意味です。それがどちらが立派かということ自分を問う、非常に立派な問かけなんだけれども、答え、「このように物思う心がわれわれを臆病にする」。つまり、結局

ハムレットはどちらかにコミットできないんです。To be にも not to be にも。

そのハムレットが5幕ではどうなっているか。5幕で剣の試合をする前のハムレットのセリフです。何となく胸騒ぎがする。ホレーシオが心配して、じゃ剣の試合はやめたらどうか、というハムレットは、資料の最後、b) ですね、5幕2場の230-234行。

Hamlet : …there's a special providence in the fall of a sparrow. If it be now, 'tis not to come; if it be not to come, it will be now; if it be not now, yet it will come; the readiness is all.

(スズメ1羽落ちるにも、特別な天意というものがある。それは“death”死と考えていい。それが今であれば将来来ることはないだろうし、もしもそれが将来こないとすれば今だろう。今でなくても来るものは必ず来るんだ。だから心の用意をする状態、覚悟することが大事なことだ。)

僕の訳ですと、「雀一羽落ちるのも神の摂理。来るべきものは今来ればあとには来ない、あとで来ないならば今来るだろう、今でなくても必ず来るものは来るのだ。何よりも覚悟が肝要」

これは to be or not to be から見るとかなり成熟した考え方ですね。三十男が to be or not to be と考えると青臭いです。といって十九の男が、来るべきものは今来なければやがて来るだろう、心の用意が大切だ、というのもちょっと似合わない。つまり“to be or not to be”から“the readiness is all”まで、精神的に十年間の成長を認めてしまえばいいと僕は思うわけです。つまりハムレットが登場したときは精神的に十九歳だった、死ぬとき三十歳、だけど実際には数ヶ月しかたってない。これはドラマの時間として許されると思います。

そのへんのところをもうちょっとしゃべろうと思ったらもう時間切れなんで、そういう僕の結論だけお話しして、結論につけ加えるとすれば——確かにこの『ハムレット』、時間から見ても矛盾があります。ただ19世紀から20世紀を経たわれわれというのはどうも矛盾というのを認めたがらない。矛盾していればどちらかが正しくてどちらかが間違っているといいたい。

しかし、シェイクスピアはそうじゃないんです。矛盾をそのまま受け入れちゃうんです。人間の中にある矛盾を。たとえばハムレットはオフィーリアを愛したか愛さなかったか。自分だってわかってないんだというのが僕の結論なんですけれども。人間というのはそういう矛盾したものを抱え込むぞと、それが人間だぞ、ということをシェイクスピアはたえずいつてるんですね。

だから、この作品としても時間的矛盾はあるけれど、そのまま認めようじゃないかといいたいのです。その時の二重ないし三重構造、体感速度はほんとうにせいぜい1週間か10日ぐらいで流れているように思うけれど、実は数ヶ月たっていたんだなど。しかしハムレットだけは十年間ぐらい成熟したのだと。ほかは違いますよ、たとえばホレーシオは十年たつ間に大学に戻っているはずだが、最後までいますよ。ガートルードは急におばあさんになったか、ならないですよ。ほかの人はみなせいぜい数ヶ月しか生きてない。ハムレットの精神だけが十年間

生きた。そういう矛盾を、SF 的な、タイムマシンがあればいけるかなとか、そんなことを考えたりもしないで、素直にそのまま受け入れてしまおうじゃないかと、まあそれが僕の結論です。

どうも、最初にお断りしたように、つまらなくてためにならないということをしゃべり続けましたけれども、どうも最後までありがとうございました。